



No.100 2011・7・15

ISHIKAWA-KEN HISTORY MUSEUM  
発行 石川県立歴史博物館  
〒920-0963 金沢市出羽町3番1号  
TEL.076(262)3236 FAX.076(262)1836  
http://www.pref.ishikawa.jp/muse/rekihaku/

ISHIKAWA-KEN  
HISTORY  
MUSEUM

れ  
き  
は  
く

夏季特別展

みやび  
宮廷の雅展

有栖川宮家から高松宮家へ



太平記絵詞 中巻 海北友雪筆

国立歴史民俗博物館所蔵

◇会 期 7月16日(土)～8月28日(日)

会期中無休

◇開館時間 午前9時～午後5時

(入場は午後4時30分まで)

◇会 場 第1特別展示室・第2特別展示室

◇入 館 料 一 般 1,100円(900円)

大 学 生 600円(400円)

小中高生 300円(200円)

※( )内は前売・20名以上の団体料金

※65歳以上は900円、各種障害者手帳をお持ちの方は前売・団体料金

◇主 催 北陸中日新聞・石川県立歴史博物館・  
石川テレビ放送

◇共 催 学習院大学

◇後 援 石川県・金沢市・金沢市教育委員会・

金沢放送局・エフエム石川

(公財)高松宮妃癌研究基金・國學院大

学・大阪青山大学・大阪青山短期大学

◆講 演 会 <入館料と入場整理券が必要です>

日 時 7月23日(土) 午後1時30分～3時

演 題 「二つの修学院図屏風」

講 師 小林 忠 氏 (学習院大学教授)

会 場 当館学習ホール (定員約80名)

※聴講には展示会入館料と講演会入場整理券が必要です。

※入場整理券は講演会当日(7月23日)正午より、当館受付で配布します。

※講演会終了後、講師による展示室でのギャラリートークも開催します。

夏季特別展

宮廷の雅展

有栖川宮家から高松宮家へ

江戸時代の初期、寛永二年（一六二五）に後陽成天皇の第七皇子好仁親王が高松宮家を創設されたことから、有栖川宮家と高松宮家の歴史が始まります。

その後、寛文七年（一六六七）、後西天皇の第二皇子幸仁親王が、高松宮家第三代を継承しましたが、同十二年（一六七二）、有栖川宮と改称されました。同宮家は、和歌と書道を家学として伝え、宮廷文化を支える役割を果たしてきました。

有栖川宮家は、大正時代まで続きましたが、大正二年（一九一三）、大正天皇の第三皇子宣仁親王が有栖川宮家の祭祀を継承され、高松宮家を立てられました。

その有栖川宮家から高松宮家に伝来した典籍、装束、調度、美術品類は、華麗な宮廷文化の雅の世界を伝え、また高松宮宣仁親王のお身の回り品々等は、明治、大正、昭和にかけての宮家の生活を知る興味深い品々です。これらの品々を一堂に展示し、宮廷の雅の世界を紹介します。

第一章 有栖川宮家の創設、修学院の風流

高松宮家を創設した好仁親王には王子がなく、後水尾天皇の皇子良仁親王が高松宮家第二代を相続しました。ところが良仁親王は、承応三年（一六五四）、

第百十一代後西天皇として即位しました。

その後、寛文七年（一六六七）、後西天皇の第二皇子幸仁親王が、高松宮家を継承し、同十二年（一六七二）、宮号を有栖川宮と改称され近代に及びました。

伏見宮・桂宮・閑院宮家とともに四親王家と称された有栖川宮家歴代の親王は、皇統の備えの役割を担い、また歴代天皇の歌道と書道の師範をつとめてきました。

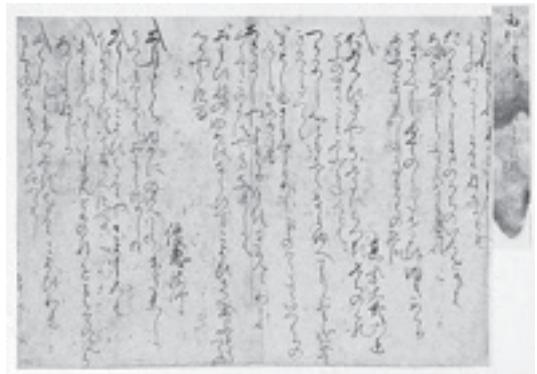
後水尾天皇は晩年、京都の東北に修学院離宮を営まれ、そこでは詩歌や茶の湯、酒宴、管絃、遊芸、陶芸など様々な風流が繰り広げられました。

後水尾天皇筆・和歌懐紙（徳川美術館、八月二日より展示）、後西天皇筆・和歌色紙（個人蔵）、靈元天皇自画賛・鶴図（国立歴史民俗博物館、八月二日より展示）、梨子地鳳凰文細太刀拵（東京国立博物館）、修学院図屏風（個人蔵、八月八日まで展示）、修学院焼・御切形茶碗（滴翠美術館）、金森宗和作・竹茶杓・銘清見かた（個人蔵）

第二章 文化の伝承

和歌は、漢詩や管絃などとともに宮廷貴族の文化的素養として大きな位置を占めました。また国文学と歴史などの記録類は、皇室をはじめ貴族の文庫に伝えられましたが、度重なる戦乱や火災で失われたものも多くを数えます。

後西天皇や霊元天皇は、大規模な書写活動を展開し副本制作に意を注ぎ、禁裏本の復興と充実を志し



重要文化財 大手鑑の内 伝西行筆・五首切  
右大臣家百首  
京都国立博物館所蔵（8月8日まで展示）

ました。その禁裏本の一部が有栖川宮家にもたらされ、高松宮家を経て、「高松宮家伝来禁裏本」として今日に伝わっています。

重文・大手鑑（京都国立博物館、八月八日まで展示）、伝伏見天皇筆・重文・新楽府白氏文集（国立歴史民俗博物館、八月一日まで展示）、土佐光信筆・うたたね草紙絵巻（国立歴史民俗博物館）、海北友雪筆・太平記絵詞 中巻（国立歴史民俗博物館）

第三章 明治維新と有栖川宮家

王政復古の号令により、有栖川宮家第九代熾仁親王は、新政府の最高職である総裁に就任しました。慶応四年（一八六八）の戊辰戦争には東征大総督となり、「錦旗」を奉じ江戸城を無血開城しました。維新後も要職を歴任し、歴史の表舞台に立ち、明治天皇から深い信任を得、後を継いだ第十代威仁親王へと引き継がれました。

また有栖川宮家は、第五代職仁親王が豊麗優美な有栖川流という書流を創成し、第八代職仁親王によ

って大成され、明治以後も継承されました。

熾仁親王所用・旗（錦の御旗）（東京国立博物館保管）、熾仁親王所用印章（國學院大學）、威仁親王所用印章（國學院大學）

#### 第四章 宮家の饗宴

京都から東京に遷った宮廷や宮家は、折衷ながら洋風の生活をおくりました。また欧米に留学する皇族も多く、外国公使などを招いた晩餐会なども多く催されました。これは西欧列強にひけをとらない国家の近代化と皇室の威厳を示すものでした。

ディナーセット（上野の森美術館）、大太鼓形ボンボニエール（学習院大学史料館寄託）、真珠飾七宝香水入置時計（高松宮妃癌研究基金）



ディナーセット

上野の森美術館所蔵



大太鼓形ボンボニエール

学習院大学史料館寄託

#### 第五章 高松宮宣仁親王―皇族に生まれて―

宣仁親王は、明治三十八年（一九〇五）、皇太子嘉仁親王（後の大正天皇）の第三皇子として青山東宮御所で生まれました。宮中の慣例にならない、生後十カ日で母宮を離れ、二人の兄（後の昭和天皇と秩父宮）とともに、赤坂御用地内の皇孫仮御殿で過ごされました。

若梅鳴弦御用之御弓・御矢（明治神宮）、宣仁親王所用・オルゴール（学習院大学史料館）、宣仁親王所用・バイオリン（学習院大学史料館）

#### 第六章 学習院―皇族・華族の学び舎―

明治十年（一八七七）、私立学校の学習院が創立されましたが、同十七年に宮内省所管の官立学校となり、華族男子子弟の入学が義務付けられました。宣仁親王は、同四十四年（一九一一）、学習院初等学科へ入学されました。当時は質実剛健な教育が実

践されていきました。

宣仁親王所用・ランドセル・筆箱・鉛筆（学習院大学史料館）

#### 第七章 成年皇族として

宣仁親王は、大正二年（一九一三）、九歳のとき、大正天皇から「高松宮」の宮号を賜り、勅命によって有栖川宮家の祭祀を継承することとなりました。後嗣のない有栖川宮家第十代威仁親王が病に臥され、同宮家が断絶の運命にあったからです。そして昭和五年（一九三〇）、徳川幕府最後の將軍であった徳川慶喜の孫にあたる徳川喜久子と結婚されました。

喜久子妃婚儀用・五衣 唐衣 裳 装束（国立歴史民俗博物館、七月二十五日まで展示）、喜久子妃所用・湯桶・盥（大阪青山歴史文学博物館）

#### 第八章 皇族のくらし―戦後から現代―

戦後の混乱期から経済成長をとげた我が国とともに、宣仁親王は、文化、芸術、福祉、スポーツなど、社会的活動を積極的に行い、日本赤十字社をはじめ多くの団体の総裁、役員をつとめられました。喜久子妃も癌の撲滅を願い、高松宮妃癌研究基金を設立されたのをはじめ、様々な社会福祉活動、医療援助に心を尽くされました。

宣仁親王作・三峰窯・志野風茶碗 銘梅花（宮内庁三の丸尚蔵館）、喜久子妃所用・五衣 唐衣 裳 装束（霞会館、七月二十六日から展示）

館長随想

# 静のこころ

脇田晴子(当館館長)



の希望で、天下の名人といわれた評判

能登半島の金剛のあたりを歩いていたら、「義経一太刀の岩」とか「弁慶二太刀の岩」その上、「義経の舟かくし」があつてほほえましい。「判官鼻頂」は、この地でも盛んであつたようである。

私は小学二年から能楽のお仕舞を習つたが、子供は少ないので、素人の謡云では、子方をみなやらされた。

能楽の子方は「橋弁慶」「船弁慶」「安宅」などに始まつて、とにかく牛若丸が多い。そして成人して義経になつても、義経は子方の役になっていることが多いのである。能楽も名人と云われた大槻十三師の「橋弁慶」の子方、五条橋で、小太刀で弁慶の薙刀なぎなたとの立廻りをやる牛若丸をやらせてもらったのは私の自慢話である。

さて能登半島に話を返して、果して義経はこの地を通つたのであろうか？ 奥州に下る道筋としては、たしかに北国筋を通るのが、当時の基本ルートだから、安宅に関を建てていたかどうかはともかくとして、北国筋は当然、通つたであらう。

頼朝は、義経の愛人の静を捕まえて、義経の行方を問おうとしたが、静は当然、その行方を云わない。怒つた頼朝をとりなしたのは北政所の政子である。政子

の白拍子舞の名手の静の舞を鶴ヶ岡八幡宮で見物した。そこで静が、

吉野山 みねのしら雪 ふみ分けて いりにし人の

あとそこひしき

賤しずや賤 賤しずの苧環おたまき 繰り返し 昔を今になす由もが

な

と謡つて舞つたのは有名な話である。やはり当時のトップスターであつた静は、氣つ風のいい女だつたのだ。頼朝は関東の幸いを言祝ことほぐべきであるのに、反逆者の義経を慕う歌を謡うとは何事かと怒つた。その頼朝に、政子は頼朝が流人であつたところを親の北条殿が反対したのに契つたこと、石橋山の合戦で頼朝が負けたとときの自分の心配・苦勞を云つて、静が義経を慕うのは当然であると取りなしている。

『吾妻鏡』という書物は、こういう人情味を時として加味し、ほろりとさせる名文であるので、後代の史料・記録の類よりも、はるかに面白い。

しかしながら、『平家物語』(八坂本)では義経は、「河越が娘、平大納言時忠卿の御娘を先として北方十人持給へり」と書いている。『義経記』では「六人

の女房達、白拍子五人」と書いている。兄頼朝が定めたといい正妻は河越氏の娘である。誇張もあるうが、戦勝將軍であるから、妻妾はたくさん居たとは思われる。しかし、妻問婚時代であり、果してその正妻が引き連れている女たちのなかに居たかどうかは問題である。それはともかく連れていた女たちを住吉の浜に打ち捨てて、静だけを連れて吉野山をさして落ちていつたと書いている。もちろん、静は白拍子舞女であるから、妾の一人であるが、物語では相思相愛に描かれている。

しかし、その静も吉野山ではぐれてしまつて道に迷い、吉野山の衆徒・僧兵に捕らえられたとか都に返されたとかで、妊娠していたので、鎌倉まで連れて行かれ、生まれた子が男子であつたので殺されてしまう。その後の静が、どうなったのかはわからない。

しかし、静のひたすらな義経への愛、トップスターで有りながらも、戦乱のなかの過酷な人生は、人々の同情を誘つて、源平の軍記物に、能楽に、芝居にたえずヒロインとして登場した。能楽でも静をヒロインとする曲・登場する曲は、現行曲では「船弁慶」「正尊」「二人静」「吉野静」など、小町物に匹敵する程である。というより、小町と静が平安から鎌倉期にいたる二天スターといえようか。

### くらし&娯楽の大博覧会「みんなの昭和」 ご来館の皆様から寄せられた思い出

春季特別展「くらし&娯楽の大博覧会—昭和歴史—1926~1989—」では、「みんなの昭和」として、来館された皆様から昭和時代の思い出や展覧会の感想を寄せていただきました。寄せられたエピソードから、昭和時代を生きた人もそうでない人も、心の中にはそれぞれの「昭和」があることを実感しました。ここにそのうちのいくつかをご紹介します。(紙面の関係上、文章を若干省略・訂正しています。) \*…印象に残った展示品

金沢市 57歳 女性

\*生活用品(洗濯機や冷蔵庫など)

玩具(フラフープ・ままごと道具)

昭和28年生まれです。子どもの頃、お祭りになると姉のおさがりの着物を着て、あめ買い銭をもらって友達と神社に行くのが楽しみでした。春の着物、秋の着物と色や模様を覚えています。マスカットや巻き寿司などごちそうも幸せでした。

白山市 56歳 男性

\*メンコ(「マッチ」と呼んでいた)

昭和30年代は、近所の家々を行き来して「メンコ」をしました。晩秋から冬の最大の遊びでした。取るか、取られるかの勝負をしたので、心臓バクバクの大勝負だったことを思い出します。昭和30年代のメンコは時代劇の映画スターがほとんどでした。

金沢市 44歳 女性

\*ホーロー看板

子どもの頃、洗面所の棚に「MG5」の整髪スプレーがありました。今は亡き父が使っていたもので、父の面影を思い出し目が潤みました。

小松市 40代 女性

\*マッチラベル・石けん・資生堂の広告

今はマッチが置かれている喫茶店はほとんど無くなったのでなおさらなつかしかったです。いろんなデザインがあって見ているだけで楽しかったです。

金沢市 37歳 女性

\*ねずみとり

高校卒業まで、昔ながらの長屋のようなところに住んでおり、夜中にはねずみやゴキブリがよく出ていました。ねずみが出たと思われた夜には、母がえさを準備してねずみとりを取りつけ、翌朝亡父が浅野川までねずみを捨てに行っていたことがなつかしく思い出されます。

白山市 25歳 女性

\*タバコのパッケージ

昭和のものや、昭和の歌が好きです。昭和の全盛期に生活していたら…といつも思います。

中能登町 24歳 男性

\*太陽の塔

昭和62年に生まれました。昭和の時代はそんなにすごしてないですが、昭和レトロのものが大好きです。

魚津市・11歳・女性

\*防空ずきん

防空ずきんは、わたが入っていて安全だと思いました。昔はこれをかぶっていたんだなと思いました。

### 催事日録



#### くらし&娯楽の大博覧会

四月二十三日から四十四日間、にわたって開催された春季特別展が好評のうちに六月五日終了しました。昭和という激動の時代を、暮らしと娯楽の資料を通して体感してもらおうという特別展でしたが、幅広い年齢層の方々に楽しんでいただくことができました。四月二十九日(昭和の日)には、昭和の資料を収集してきた上田輝一さん(白山市在住)をお招きしてトークショーが開かれ、収集家の苦労話などで大いに盛り上がりました。

四月二十三日から四十四日間、にわたって開催された春季特別展が好評のうちに六月五日終了しました。昭和という激動の時代を、暮らしと娯楽の資料を通して体感してもらおうという特別展でしたが、幅広い年齢層の方々に楽しんでいただくことができました。

#### 春の歴史散歩 「八坂から馬坂へ」



五月十二日、二十二名の方が参加され歴史散歩が行われました。天候が心配される中、松山寺、永福寺、宝円寺など加賀藩ゆかりの寺院を巡りました。木曾坂の百一段の階段にも負けず、途中から降ってきた雨にも負けず、皆さん熱心に見学されました。安楽寺ではご住職から丁寧なご案内をいただき、感謝申し上げます。新たな発見があつたり、普段はあまり意識してない金沢を体感した「散歩」でした。

五月十二日、二十二名の方が参加され歴史散歩が行われました。天候が心配される中、松山寺、永福寺、宝円寺など加賀藩ゆかりの寺院を巡りました。木曾坂の百一段の階段にも負けず、途中から降ってきた雨にも負けず、皆さん熱心に見学されました。安楽寺ではご住職から丁寧なご案内をいただき、感謝申し上げます。新たな発見があつたり、普段はあまり意識してない金沢を体感した「散歩」でした。

#### 石川の歴史遺産セミナー



六月二十六日、十二回目となる歴史遺産セミナーが「近世・近代能登の生産と海運」というテーマで開催されました。県内外からお迎えした三名の講師の方による講演とパネルディスカッションが行われ、能登の主要な港津の役割を生産や流通(専売)の視点から捉えることができそうです。今回も多くの方のご参加をいただき、関心の高さを示していました。

六月二十六日、十二回目となる歴史遺産セミナーが「近世・近代能登の生産と海運」というテーマで開催されました。県内外からお迎えした三名の講師の方による講演とパネルディスカッションが行われ、能登の主要な港津の役割を生産や流通(専売)の視点から捉えることができそうです。今回も多くの方のご参加をいただき、関心の高さを示していました。

#### 行事日程(8~9月)

月日	行事	内容	容
8/20(土)	れきはくゼミナール	縄文時代の暮らしと生業	(学芸主任 三浦俊明)
9/2(金)	常設展示「森下麟	城下町金沢の形成	(学芸員 塩崎久代)
9/17(土)	れきはくゼミナール	塩と半島の古代史	(学芸主任 戸潤幹夫)

- ◎開講時間：午後2時
- ◎会場：常設展示ワゴンポイント解説：各関係展示室
- ◎会費：なし
- ◎受講料：常設展示ワゴンポイント解説：展示室内行事につき、入館料が必要
- ◎申し込み：不要 ※当日受付へお申し出下さい。

人事異動(四月一日付)
転入 普及課 学芸専門員 岩島千津代(金沢桜丘高等学校より)
転出 普及課 学芸専門員 小森康弘(内灘高等学校へ)
昇任 総務課 主幹 森 孝弘

れきはく トリヴィア

『石川れきはく』創刊号のころ

本誌も一〇〇号の節目を迎えました。年四回発行のペースで、ちょうど二十五年かかったこととなります。今回は本誌誕生のころのお話です。

当館の広報誌は、前身の郷土資料館時代(昭和四十三〜六十年)にも『郷土資料館だより』が発行(四十五号まで)されていましたが、新博物館開館(昭和六十一年十月二十五日開館)にあたり、誌名も含めてすべて一新されることになりました。

そこで新しい誌名ですが、これは博物館職員全員から募集しました。ある課長提案の「石川歴史」が最終候補となり、結局「歴史」をひらがな表記に改めた上で「石川れきはく」に決定。「れきはくメイト」や「れきはくゼミナル」など、当館事業には「れきはく」という愛称を冠したものがいくつもありますが、公式に使われたのはこれが最初です。

そして、創刊号の特集記事は普通なら開館記念特別展の華々しい紹介となるのですが、新博物館初の特別展(「冷泉家の歴史と文化」展)は、何と翌春の開催



『石川れきはく』創刊号表紙

でした。創刊号発行は開館日に合わせていたので、これはちよつと難しい。どうするかいろいろ意見が分かれたのですが、検討の結果、博物館



特集記事「展示の話」挿入イラスト

の基本的な活動を分かりやすく紹介する記事を、翌春まで連載することになりました。

創刊号の第一回は、題して「博物館入門セミナーの1展示の話」。展覧会が開催されるまでの仕事の流れを、イラストを交えて紹介したものです。博物館の広報誌といえば、一般的に「お堅い」のが主流だった当時としては、少し異色だったと思います。ちなみにイラストに描かれている人物たちは、すべて当時の職員の似顔絵で、体形もそのまま生き写しです。イラストが得意な若い女性スタッフに協力してもらったのですが、今や古参学芸員たちの若き日の姿をとどめた、貴重なワンシーンとなっていました。

こうして今一〇〇号を迎えました。この間、博物館の面白さと魅力を少しでもお伝えしようと、毎回悪戦苦闘してきたのですが、果たして皆様のご期待にどれだけお応えできたでしょうか。明日の『石川れきはく』のために、皆様からの貴重なご意見をお待ちしています。

※トリヴィア=雑学的な事柄や知識、豆知識

やさしさ品質

会員募集中

ご来店いただくだけで10ポイントをプレゼント!

Mei《セゾン》カード

毎月3,000円のお積立てで1年後の満期時には1ヵ月分のボーナスをプレゼント

名鉄クローバー友の会

65歳以上のお客様にうれしいサービス

エムザさくら倶楽部

もっとお客様へ、もっと地域に

MEITETSU MIZA めいてつ・エムザ 金沢市武蔵町15番1号 TEL代表(076)260-1111 http://www.meitetsumza.com/

展示替え等による休館日(7〜9月)

- 7月14日(木)・15日(金) 2日間
- 8月29日(月)〜31日(水) 3日間
- 9月21日(水)・22日(木) 2日間

本多の森から

昭和の世相やくらし、流行や娯楽を取り上げた春季特別展は、様々な年齢層の方にご来場いただきました。展示品の中に思い出の品を見つけ喜ぶ方、しみじみと当時のくらしを振り返る方:会場はそれぞれの「昭和」であふれていました。

高齢の方は、戦中の物を目にするのは辛いのではないかと思います。逆にごく長く足を止め、展示品に見入る方が多かったことが印象的でした。戦争という困難を乗り越えた世代にとっては、辛い体験こそが生きる力になっているのではないかと改めて感じました。

さて、夏はがらりと雰囲気を変え、宮家に伝わる文化財と、知られざる宮廷生活を紹介する「宮廷の雅展」が博物館にやってきました。どうぞお楽しみに!